

幼児の遊びにおける保育者の言語的なかかわりの在り方

A Study of Verbal Communication for Children and A Nursery Teacher in Play

遠藤 悟史

Satosi ENDO

I はじめに

現在の幼稚園教育要領、保育所保育指針では環境を通して行う保育が強調されている。ここでいう環境とは保育者、幼児などの人的環境、施設、遊具などの物的環境と共に自然や社会事象、あるいは人、物、場が相互に関連しあって作り出す状況すべてを環境としてとらえている。そのなかでも人的環境としての保育者の役割が大きな影響を与えるということは明らかである。保育者は園生活を共に展開する中で幼児とかかわりを持ち、そのなかで一人一人の幼児の思いを受け止め、尊重しながら、援助していく必要がある。また、幼稚園教育指導資料第4集では、保育者の新しい専門性として一人一人の幼児の内面を理解し、信頼関係を築きながら、発達に必要な経験を幼児自らが獲得していけるように援助していくことが明示された。その過程で保育者自身が一人一人の幼児に日常どのような援助をしていくのか振り返り、自分自身の保育に気づくことから始めることが大事であるといわれている。

では一人一人の気持ちを大事にするための援助にはどのようなものがあるのだろうか。柴崎(1992)によれば、保育者の援助には大きく分類して、1. 受容的にかかわる、2. 共感的にかかわる、3. 志向的にかかわる、の3つがあるといわれている。保育者はこのような援助をしていくことが大切なのだが、私はうまくいかないことがたくさんあったと感じていた。本研究をはじめ前、私は幼稚園と保育所で7年間

勤務してきたが子供とのかかわりの中で、指示ばかりをしたり、自分の思いを一方的に伝えてしまうことが多かったように思う。そのようなかかわりが多くなると子供が「先生～してもいい？」と私に聞きにきたり、私の目を気にしたり様子をうかがったりしているような場面を体験した。そのような場面に出会うと、とても寂しく、空しい気持ちになった。また子供達と対話をしていても、最初から答えを用意してしまったり、対話がずれてしまうことがあり、スムーズに子供と話ができないということを感じていた。

そこで、本研究においては、私自身が子供を援助していくなかでの、言語を通してのかかわりに着目し、子供と対話するなかで自分自身の言葉かけや対話がどのように子供の気持ちとずれてしまうのか、その自分と子供とのかかわりを見直して、改善したいと思う。

II 研究の方法

本研究においては保育記録とカンファレンスを用いることにした。子供への言葉かけや援助がうまくいかなかった場面を記録におこし、それをもとにして保育カンファレンスを行い、子供の気持ちはどのようなものであったのか、また自分の言葉かけや援助がどのようなものであったのかを振り返り、問題点を明らかにするという保育カンファレンス法をくり返していく。そのためには、その場面をイメージできるようなくわしい記録が必要となってくる。このように

記録とカンファレンスを通して視点を広げることにより、自分の保育における言葉かけを見直し子供とのかかわり方を修正していくことにした。

1. 記録の取り方

保育中カセットテープを携帯し、分析したいと感じた場面を録音し、保育終了後、それを参考にしながらその場面を振り返って記録を作成した。

2. 記録の分析

① 作成した記録をもとにスーパーバイザーとカンファレンス（話し合うこと）によって、その場面での自分と子供とのかかわり方の問題点を明らかにして、その場面ではどのように対応すれば良かったのか方向性を考えた。

② 各々の記録の中で取り上げられた問題点を類型化し、自分のかかわり方の傾向を明らかにしていった。

3. 問題点の改善

保育をしながら問題として明らかになった点

にうまく対応できるようになったかを記録を通して評価し見直していった。

Ⅲ 記録の分析と考察

1. 記録の回数と事例数

平成8年5月1日より記録を取り始め、平成9年10月28日まで合計29回記録を取った。取った記録はエピソード、場面ごとに区分し、同じ記録でも場面が異なる場合は2つに分けた。こうしてエピソード、場面ごとの記録に通し番号をつけた。記録の場合は合計38までである。これらの記録を言葉かけの種類と内容、言葉かけの問題点という2つの視点から分析した。

2. 記録の分析 I

(1) 記録からみた言葉かけの種類と内容の分析

保育者の援助に関する先行研究には柴崎（1992年）、柴崎（1994年）がある。それらの研究に示された援助の仕方を整理すると表1のようになる。そこでこの分類に沿って、記録を分析し、それぞれの対話の内容についての私のかかわり方の傾向について考察してみた。その分析結果は次のようであった。

表1

種 類	内 容
(a)受容的なかかわり	①甘える気持ちを受け止める ②慰める ③悲しみを受け止める ④嬉しい気持ちを受け止める ⑤その行為を受け止める ⑥見守る ⑦見ない ⑧ありのままを認める
(b)共感的なかかわり	①うまくできない時には方法を教える ②うまく説明できない子の代弁をする ③一緒に考えていく ④おもしろそうなヒントやアイディアをだす ⑤遊びのきっかけを作る ⑥一緒に楽しむ ⑦自分の気持ちを言葉にする ⑧子供の考えを認める
(c)志向的な関わり	①モデルになる ②励まし見守る ③期待する ④叱る ⑤力関係を調整する ⑥けんかを調整する ⑦わからないことを伝える

(注) この表は柴崎正行（1992年）『幼児の発達理解と援助』、柴崎正行（1994年）『保育方法の探求』を参考にしながら遠藤が作成したものである。

(a) 受容的にかかわっている場面の記録の分析
《記録24-B》

平成9年9月16日(火)

時間 9:30~9:35

場所 ホールの押し入れの中で

年齢 4歳児, A男

連休明けの火曜日, Tがホールへ出ている布団を押し入れの上の段に入れようとすると, 下の段にA男が膝をかかえてメソメソしていた。TはしゃがみこみA男に声をかけると, A男は「保育園きたくなかった」とTに話してくれた。T 「保育園きたくなかったんだ, どうしてき

たくなかったの」とやさしく話しかける

A男「おうちで遊びたかったの」泣きながら答える

T 「おうちで遊びたかったんだ, そう,」とうなずくように答える

そして続けて

T 「今日はお休みの後だったしね, お母さんに行ってきたさいって言われたんだ」

A男「うん」とうなずく

T 「a 保育園, 今日ね, おもしろいよ, サッカーしたり, 戦いごっこしたりして遊ぼうよ」と励ますようにこたえる

しかしA男は下を向いてあまり反応せずめそめそしているのだ

T 「b しばらくここにいれば, もうちょっとしたら迎えにくるからね」と声をかけその場を立ち去った

その後10分位してA男は外に出てきて廊下の所で座り込んだり, ままごとコーナーで一人で遊んでいた。した。

(内容分析)

気持ちの落ち込んでいるA男に対して下線aのように楽しいことに目を向けるように慰め, 励ましてみた。しかし, まだA男の気持ちが落ち込んだままであるのを感じ下線bのように声をかけ1人での状態に対する不安を取り除こうとした。しかしA男の不安な気持ちをうまく

取り除くことができず, しばらく, そっとしておこうと思いその場を立ち去った。その後, しばらくしてからA男は1人で遊んでいたことから, 必ずしもA男の気持ちを慰めることができたとは思われない。また「迎えにくるから」と声をかけているが実際には迎えに行っていないのでA男はTが迎えに来るのを待っていたのかもしれない, 待ち切れずに外へ出てきたのではないかと考えられる。もう少し早めに, もう一度声をかけに行く必要があったのではないかと思う。このことから, この記録は表1の(a)②に当てはまると考えられる。

(b) 共感的にかかわっている場面の記録の分析
《記録22》

平成9年9月12日(金)

時間 9:30~9:40

場所 園庭

年齢 5歳児, M男

2日前から赤土を使ってお団子やおにぎりなどいろいろな形を作り, 作ったお団子は思い思いの場所に隠している。M男はどこかに隠しておいたお団子やおにぎりをざるに入れて大事そうに持ち歩いていた。その様子を見て

T 「M男君, 堅くなったね, だいふ堅くなったね」と話しかける

M男は少し笑みを浮かべ嬉しそう

T 「まだ, もってたんだ。どこに隠しておいたの, M男君」

M男はニヤニヤして答えようとしなない。

T 「お団子に, ハートマークに, 三角に, ちよつとさわらして」とのぞきこむように声をかける

M男「いいよ」と答えざるをTのほうへ差し出す

T 「すごく堅いね」と感心するように, さわりながら話しかける

T 「どこに隠しておいたの」と続けて話しかける

M男「そこ、」と物置のほうを指差しながら答える

T 「そこって、物置の下？」と確かめるように話す

M男「物置に縄跳びとかおいてあるでしょ」

T 「ああ、物置のなかの縄跳びがおいてあるところか」となるほどという感じで答える

M男「これボンバーみたい、ボンバーチッチッどかん」と4角形のを手にとりながらTに話しかける

T 「ボンバーって爆弾？」

M男「そうだよ」

M男「aこれに、色つけたらどうなるかな」

T 「bあー、色つけたらね、どうやってつけるの」

M男「c絵の具で、絵の具の中にずっと入れておいたらどうなるのかな」

T 「dどうなるかな、じゃあ、ちょっとやってみようか」と誘うように声をかける

M男「e実験してみよう」

T 「絵の具もってやってみなよ、自分の絵の具あるでしょ、それでやってみな、まるいやつ」と声をかける

M男「どれをぬったら、それがなぞだ」とにやにやしながら室内に入り絵の具の準備をはじめ、廊下に座り込み絵の具をぬりはじめた。

(内容分析)

TはM男の団子が堅くなったことを見たり、触ったりしながら言葉で認めてみた。そのような状態であったのでM男は下線aのように新しい考えが出てきたのではないかと思う。そして、その考えをどのような方法で行うかTは下線bのように尋ねることによりM男もその方法を言葉にし、お互いにその方法を確認することができた。そして、その考えにTは下線dのように共感して考えを認め、励ましている。そのことにより下線eのようにM男は意欲をもって、楽しく取り組むことができたと思う。このように

新しい考えが子供から出てくるのは子供自身が認められていると感じているからではないかと考えられる。このことから、この記録は表1の(b)一⑧に当てはまると考えられる。

(c) 志向的にかかわっている場面の記録の分析 《記録14》

平成9年1月7日(火)

時間 9:20~9:30

場所 保育室の前の廊下で

年齢 4歳児、N男

N男が独楽とひもをTの所へもってきて「回して」というのでTは回してあげた。1度回してあげ、「もう一度、回してあげる」と声をかけるがN男は独楽を手にもって回したい様子だったので紐の巻き方から教えるが旨く巻くことができない。そこで

T 「先生がやってあげるね」と声をかけN男から独楽を受け取り紐を巻く

N男「どうやってぴょんって投げるの」と尋ねてくるので

T 「こうだよ」と投げる真似をして「a投げ
る所だけやってみる」と誘いかける

N男「うん」とうなずくのでTはN男の手に独楽を持たせ

T 「b手でもって、こうやって、えいって、
投げたらひくんだよ」と手を取りながら説明する

T 「お友達のいない所で投げて」と伝える

N男「できるかな」と少し自信なさそうな様子

T 「cできるよ、やってみようよ、失敗してもいいからさ」

N男は独楽を回す、しかし失敗

N男「失敗しちゃったよ」とTの方を見ながら話しかける

T 「d失敗しちゃったな、よし、もう一回が
んばってごらんよ、紐巻いてあげるから」
と答え独楽を手にとり紐をまいてN男に独楽を渡す。

N男「こうだよ」と独楽を持ち回すまねをし
ながらたしかめるようにTに話す

T 「そうだよ、紐をもってないとだめだよ」
と答え、N男の手を取りひもを指の間には
さんであげると

N男は独楽をなげ、独楽は逆さになって少
し回った。

T 「回った、少し回った」と声をあげると

N男「回ってなかったよ」とあっさり答える

T 「回ってなかった、少し回ったんだけどな」
と残念そうに答える

その後、このような援助を何度か繰り返すと、
N男は独楽を回すことができた

(内容分析)

この場面ではTが独楽を回して見せることに
より、N男が独楽回しをやってみたいという気
持ちは高まってきたのではないかと感じた。し
かし紐をまいてそして独楽を回すことはN男に
は負担であると感じ、N男ができそうな独楽を
回す部分を経験させようと思い下線aのように
声をかけてみた。しばらく紐を巻くことだけを
していたので独楽を回すという楽しさがなくなっ

てしまうと思ったからである。そして下線bの
ように手を取りながら説明してみたが、その言
葉には具体性がなくわかりずらかったのではな
いかと感じる。

少し不安がっているN男に対して下線cでは
励ましてみた。そしてN男は回してみようとい
う気持ちができたのではないかと思う。しかし
N男は失敗してしまう。しかし下線dのように
また励まし、紐をまいてあげるにより、意
欲が少しづつわいてきたのではないかと思う。
N男のできない部分を手伝い、できそうな部分
を励ましながら取り組ませることによりN男の
負担もなくなり、独楽回しに根気強く取り組ん
だと思う。このことから、この記録は表1の(c)ー
②に当てはまると考えられる。

(2) 私の言葉かけの内容についてのまとめと考 察

私の言葉かけの内容を表1に照らし合わせ記
録番号をつけると表2のようになった。このこ
とから私の言葉かけにはどのような傾向がある
か考察していくことにする。

表2

種類	内容	記録番号
(a)受容的なかわり	①甘える気持ちを受け止める ②慰める ③悲しみを受け止める ④嬉しい気持ちを受け止める ⑤その行為を受け止める ⑥見守る ⑦見ない ⑧ありのままを認める	26 24-B 24-A 18-A
(b)共感的なかわり	①うまくできない時には方法を教える ②うまく説明できない子の代弁をする ③一緒に考えていく ④おもしろそうなヒントやアイディアをだす ⑤遊びのきっかけを作る ⑥一緒に楽しむ ⑦自分の気持ちを言葉にする ⑧子供の考えを認める	2 23 27 22
(c)志向的なかわり	①モデルになる ②励まし見守る ③期待する ④叱る ⑤力関係を調整する ⑥けんかを調整する ⑦わからないことをつたえる	18-B 14 28 25 13

(a) 受容的なかわりについて

慰めることはよくあるが、見守ることやありのまま認めることが少ないように思う。子供が悲しんでいる場面を見たりすると『助けてあげなくては、なんとかしよう』という思いが、その子に言葉をかけていると思う。しかし見守ったり、ありのままを認めることが少ないのは、私自身がその子供に気がつかないからではないかと思う。子供が遊んでいる姿を見て、『遊んでるな』と感じ何もせずただその場面を通り過ぎてしまうことが多いように思う。その為、記録をとることができないでいたのではないかと考えられる。無意識のうちに、そのような援助があるのかもしれないが、意図的にそのような援助をしていたことはあまりないと思う。子供の姿を見てはしっかりしている時は援助しやすいが、保育者が気がつかなかったり、見落としたりしている時は援助しにくいと思う。

(b) 共感的なかわりについて

積極的に子供とかかわって、楽しむことや、ほめることは多いが子供が困っているとき、子供の代弁をしたり、方法を教えたりすることが少ないように思う。

(c) 志向的なかわりについて

志向的なかわりが多い。これはどうしても男性的な役割を担うために必要なときもあると考えられる。しかし、子供にまかせることや、見ないふりをするにより子供が自分で解決できるような場面をつくることも大切ではないかと思う。

3. 記録の分析Ⅱ

(1) 記録からみた私の言葉かけの問題点

うまくいかない場面、ずれてしまった場面の記録から自分の言葉かけの問題点を分析検討してみた。その分析の結果は次のようになった。

《記録3》

平成8年5月9日(木)

時間 9:40~9:50

場所 保育室の畳の上のままごとコーナー

年齢 4歳児, M男

TがままごとコーナーでA子と折り紙をしているとD男がTに少し笑顔を見せて、コピー用紙で作った剣とコピー用紙を2, 3枚持ってきた。嬉しそうな声で

D男「かたい, じょうぶ」

T 「かたい, じょうぶ」とD男の剣を見ながら確かめるように答える。

T 「遠藤先生も作ろうかな剣, これ1枚くれる?」とD男の紙を指差す。

D男「いいよ」と答え, TはD男の紙を手に取り

T 「a どうやって作るの? やり方教えて」するとD男は声ははずませながら ①

D男「こうやって, まるめて, まるめて, まるめて,」と言いながら紙を丸めてTに見せるように作り方を教えてくれる

T 「まるめて, まるめて」と言いながら紙を丸めて剣を作り始める。

D男「まるめて, まるめて」と言いながら剣を作りセロハンテープでとめる。その間にTも剣を完成させると

D男「貸して」とTの剣を手にとり聞く。少しびっくりして ②

T 「え, 貸して?」, 一呼吸おいて「b 合体させるんじゃないの?, どうするの?」と尋ねる

D男「c うーん…合体させる」と言うと手にもっていたTの剣をD男の剣につなげる

T 「すげー長い剣になった」

D男「でも, 短い, 上の方はすごく長い」と仕方なく納得した様子

そこへ, いきなり走ってM男がやってきて

M男「D男いいからあいつやっつけてきてよ」とあわてた口調で言いに来る。

D男が答える前に ③

T 「d お友達の剣で, お友達のことエイエイってやったら, いやがっちゃうからよくない

よ」とD男に伝える。

D男「でも、剣と剣をこうやってターとやる」と持っている剣を両手に持ち剣同志を交差させて見せる。

T「eターと合わせてパンパンとやるやつ、お友達のことやらないで、剣同志でやるのか、じゃ、先生とやろうか」

D男「えー」と少し、にやけながら嫌そうな返事をする。

(この記録にみられた問題点)

① 会話がずれてしまう

堅い剣ができ上がり嬉しそうにしているD男に対して、Tも仲間に入って一緒に遊びたいという気持ちが強くでて剣の作り方を知っているにもかかわらず、下線aのような言葉かけを試みた。しかし、D男がどうしてもこの剣を作ったのか、その剣をどうしようとしたのか、どのようなイメージをもっていたのか等、尋ねることにより、D男と共感的にかかわれたのではないかと思う。一緒に遊ぶことがよいことだと思い、D男の仲間に入るということだけを目的とした言葉かけになってしまい会話がずれてしまっているのではないかと思う。

② 自分の思った事を子供が話す前に先に言ってしまう

この場面ではD男に「貸して」と言われ、Tは『そうだ、きっと剣を2つ合わせて合体させるのでは』と感じ下線bのように、そのことをすぐに言葉にしてみた。そこで「合体させるんじゃないの」という言葉かけを使うことにより、D男にそうしたいということを無意識に与えて

しまっていると考えられる。また同時に、『合体させることがいいこと』という価値観を提示しているように思う。そしてD男は下線cのように少し考え『合体させる』と答えている。Tはこの剣をどうしたいのか、理由を尋ねることにより、D男のイメージを知ることができ、それについて、Tの意見や考えを伝えることができたのではないかと思う。

③ 先回りをしている

剣ができ上がったところにM男がやってきて、M男は「D男いいからあいつやつつけてきてよ」とD男に助けを求めてきた。その瞬間、Tは、剣をもっているD男がこのまま行ったら、『戦いごっこが始まる、危ない、お友達の事を叩いたら、』と思い、下線dのようにD男が返事をする前にTが答えてみた。しかし、この時点でD男とM男の対話を遮断してしまっている。TはM男とD男の対話の様子を見守る姿勢が必要であったのではないかと思う。そしてD男は「でも…、」とM男の方へ行きたいという気持ちをTに伝えるが、『剣を持ての戦いごっこだけはやらせたくない』という思いが強く、下線eのように話しかけてみた。そこではD男のことをTの意図する方向へもっていこうとする気持ちが強く現れていると思う。その結果D男の気持ちは少しも受け入れず、もやもやとした気持ちが残ってしまったのではないかと思う。

(2) 私の言葉かけの問題点についてのまとめと考察
これらの問題点を整理すると次のように表に表すことができる

表3

内 容	問題点	記録番号
ア 受け取り方について	(1)自分の思いが強すぎる	3-①
	(2)先回りをしている	3-③
	(3)子供の思いを具体的に共有していない	7-①
イ 対話の仕方について	(1)子供が話す前に話してしまう	3-②
	(2)Tの決めつけた言葉にしている	5-①
	(3)子供の言葉の意味を明確に理解していない	8-①
ウ 伝え方について	(1)どこがよいのか具体的に伝えていない	5-②
	(2)自分で感じたことを子供に表現していない	6-①
	(3)具体的に事情を説明していない	17-①

私の問題点をこのように表にまとめて、整理、分析していくと子供の気持ちを受け止めないで自分の思ったり感じたりしたことを言葉にしてしまう傾向があると思う。また対話のなかで相手の言葉の意味を理解しないで、曖昧なまま対話をすすめてしまうことが多くあると感じた。

1974年、R. Weiss博士はINREAL (Innter Reactive Learning and Communication) を開発した。コミュニケーションの観点から、子供がのびのびできる遊びを媒介に、かかわる大人側をトレーニングすることで、子供に楽しいコミュニケーションを体験させ、その良い体験を通じて、子供にもっと伝えようという意欲や、子供が今獲得している伝達手段の有効性について気付かせることを目的としている。そのなかでかかわり方の具体的なながかりとして、大人のとるべき基本姿勢としてSOULを提言している。

大人の基本姿勢 SOUL

Silence	(沈黙) 子供をしずかに見守り
Observation	(観察) よく観察し、子供が今何を考え
Understanding	(理解) 何をしようとしているのか理解し
Listening	(聴く) 子供の言葉に心から耳を傾ける

SOULと自分のかかわり方を比較するとこれらの基本姿勢が苦手であったのではないかと思います。

IV. 改善への試み

1. 記録を通してのかかわり方の比較

- (1) 問題点として、自分で感じたことを言葉で表現していない {表3ウー(2)} ことについて《記録6》と《記録25》で場面を比較して考えていきたいと思う。

《記録6》

平成8年6月24日(月)

時間 10:15~10:20

場所 園庭の隅で

年齢 4歳, S子

園庭の隅でS子が涙を浮かべて地面に座り込んでいる。その隣にM子が付き添うようにすわっていた。S子は悔しそうな表情で涙をこらえている様子であった。

T 「どうしたの? S子ちゃん」とやさしい口調で答えると

M子「C子ちゃんとけんかしたんだって」とTに教えてくれるように話す

T 「そう、けんかしちゃったんだ」とS子の方を見ながら答える

S子「C子ちゃんがシャベル投げたりするんだもの」と下を見て泣きながら話す

T 「え!」と一瞬びっくりして、一呼吸してから「シャベル投げたりするの、そう」とS子を見ながらうなづく

——略——

S子「もう、絶対遊ばないから、鬼太郎ごっこやんないからね」と怒った口調で顔をあげて遠くを見ながら話す

T 「う〜ん」とうなづく

S子「ねこ娘とかやらないからね」

T 「う〜ん」とうなずき、「ねこ娘とかやらないの、C子とA子遊んでるよ」とC子とA子が遊んでいる方を見ながら話しかける

S子「だってS子ちゃんが代わってっていうのに、シャベル投げたんだもん、C子ちゃんなんか嫌いだもん、絶対嫌いだもんね」と強い口調で話す

T 「そう、わかった」と苦笑いを浮かべながら返事をする

S子はまだ納得しないようで

S子「ごめんなさいって言いなさいってN先生が言っているのに、ごめんねっていわないの」と泣きながらTの方をちらちら見ながら話す

T 「ごめんねっていわないの、そう」とうなづく

M子「S子ちゃんにうるさく泣かれたのが悔しかったんじゃないの」とTに話す

S子「ねこ娘に代わってくれれば泣かなかった

のに」と遠くを見ながら話す

《記録25》

平成9年9月19日（金）

時間 10:00～10:05

場所 園庭の真ん中で

年齢 5歳，H男，N男

園庭の真ん中でH男が今にも出そうな涙をこらえ体にも力を入れて立っていた。そのすぐ近くにK男が三輪車にのって、もじもじしている。Tはその様子を見て『何かあったのだろう』と感じH男に声をかけた。H男とK男はさっきまで2人で追いかけてこのような事をして遊んでいた。

T 「H男君どうしたの」

H男「K男がぶんなぐったの」とこらえていた涙をだしながらTに答える

T 「K男がぶんなぐったの、痛かったね、あらあら」とうなずくように返事をすると

H男「エーン」と声をあげ悔しそうに泣きはじめた

TとH男のやり取りを聞きながらK男がTの方に近づいてきたので

T 「aなんで、ぶんなぐったの」とK男に話しかける

K男「泥警やっぱりやめようと思ったらね、あのねやってきたの」の説明するように答える

T 「あ、K男くんは…」と話しかけたところで横からH男が勢いよく

H男「やるって言ったのに、やんないっていうんだもん」とK男に向かって話す

K男「泥警やろうと思ったんだけどやっぱりやめようと思ったんだもん」とTに話す

T 「そしたらH男君がやろうぜということになって、けんかになっちゃったんだ」

Tの話を聞いてH男もK男もうなずいている

T 「じゃ、K男君は泥警やるって言ったんだ

けどやっぱりやりたくなかったんだね」とK男に話す

K男「うん」とうなずく

T 「b H男君は、K男君と泥警やりたかったんだ」とH男に話す

H男「K男がやるって言ったんだからな…」とまた悔しそうに泣きながらK男に言う

T 「K男がやるって言ったのにな、やんないって言ったんだ、そうか、そうか」とH男に言う

T 「c やっぱりやめようと思ったんだって」とH男に伝えるように話す

（考察）

子供同志のけんかの仲裁をしていく過程にはまずはじめに、その場面を振り返っていくような言葉かけが必要であると思う。記録6ではそのような言葉かけはなく、Tのうなずいているだけの姿しかみられない。そのため、S子の言葉を聞いているだけになってしまい何の問題解決にもならなかったと思う。しかし、記録25では、はじめに下線aのようにけんかがどうして起きたのか理由をたずねている。そしてけんかが起きた原因を明らかにし、事実関係を確認しながら、K男、H男の双方に伝えている。ここではK男、H男はうなずきながら話を聞いている。そして、下線bではH男の気持ちを明らかにし、下線cではK男の気持ちを明らかにしている。双方の気持ちを明らかにすることにより、Tは問題解決の糸口を作ろうとする姿が見られた。

2. 改善への試みについての考察

問題点を改善するにあたり、自分の中でその問題点を認識していなくては改善することはできないと思う。

自分の思いが強すぎるという点については自分が最も苦手とする面であると思う。子供の話を聞く前に、自分の意見や気持ちを子供に伝えてしまっていることが多くあったと思う。これ

は、私が保育者として経験を積んできて、子供達を自分の意図する方向へ動かしたいという気持ちが強いためだと思われる。このようなことを解決していく為には、自分の気持ちを押さえ、子供の話に心から耳を傾ける姿勢が必要であり、子供の話を決めつけずに聞いていくことが大事であると思う。現在は子供の話の聞き方として、「どうして」、「何で」、「どこで」と子供の気持ちをたずねる言葉かけが多く見られるようになったと感じている。

子供の言葉の意味を対話の中で明確にしていけないという点については、対話の流れの中で、話を先に進めなくてはという焦る気持ちが出てしまうためではないかと思う。また、疑問に感じたことや、意味のわからない言葉について、うなずいたり、返事をしたりして曖昧にしまうことが多くあったと感じている。このようなことを解決していくには、聞いたまま曖昧にしないで1つ1つ確認したり、子供が話をするまで少し待ったりして余裕をもって対話していくことが大事であると感じている。現在は対話の中で意味がわからなかったりした時に話をもとに戻したり、確認したりする言葉かけが少しできるようになったと思う。しかし、言葉が足りないことが多く、改善することが難しいと感じている。

どこが良いのか具体的な内容を伝えていないという点については意識することにより容易に改善することができたのではないかと思う。ほめるときには意識的に行うことが多くあると思う。対話をしている時に余裕があるのではないかと考えられる。

自分の問題点となっていることは多くあるが少し変化してきたと思う。子供との対話の中で大事なことは、子供の話に耳を傾ける姿勢と、それを理解しようとする気持ちが大事であると思う。保育の流れのなかでは、その場面、場面で瞬間的に対応していくことが必要な場面が多いと思う。そのような場面で余裕をもって子供達とかかわることができれば私の問題点はおも

と改善できるのではないかと感じている。

V まとめ

本研究は自分の保育記録をとることから始まったが、はじめは、その記録そのものが、わかりづらいものであった。その為、記録を読み返しても、その場面でのかかわり方、雰囲気などがはっきりせず、自分が子供とどのようにかかわっているのか分析することができなかった。正確な記録を作成することが難しいと感じた。しかし、回を重ねるごとにわかりやすい記録を作成できるようになってきた。

保育記録を通し自分自身のかかわりがどのようなものであるかを整理、分析することにより、自分の保育の傾向を知ることができたと思う。保育記録を見直していくと、その時はうまく援助できたと思っていたことでも子供と対話がずれてしまうことがあったり、何げなく言葉にしていたことでも、子供に大きな影響を与えてしまったりする場面が多く見られた。

保育者は子供に指示をしたり、子供に保育者の価値観を伝えたり、意図する方向に動かしたりしようとする気持ちが強ければ強いほど、子供との対話がうまくとれないと感じる。子供の自主性や主体性を育てるために保育者は、子供と対等の関係を大事にして、相互交渉しながら対話をしていくことであると感じる。

子供を言葉で援助をしていく中で、保育者はうまくいくときも、失敗するときもある。しかし、どちらの場合においても、その原因、理由を保育者が、自分自身で振り返ることにより、自分自身のかかわりが明らかになるのではないかと思う。記録をとることにより、うまくいかない面を、「変えよう、変わろう」という意識が高まったと思う。また記録を読み返すことにより、その時の子供とのかかわりをはっきりと思い出ことができ、記録の大切さを改めて感じる。今後も保育者として子供達とかかわっていくが、この研究で学んだ事を大切にしていきたいと考えている。

自分で書いた記録をすべてのせることは紙面の都合上できなかった。傾向や問題点がはっきり出ているものをのせたが、それ以外の記録も分析の対象にはしているのでとても勉強になった。

謝 辞

本研究をすすめるにあたり、ご指導くださった柴崎正行助教授に心から感謝いたします。相談にのっていただいたり、お手伝いいただいた安斎智子さんにお礼申し上げます。また、与野市立鈴谷西保育園の園長先生をはじめ、諸先生方には保育園を留守にすることが多く御迷惑をおかけしました。この場をかりてお礼申し上げます。

〈参考文献〉

- 1) 柴崎正行他編著「保育方法の探求」建帛社 1994年
- 2) 柴崎正行「幼児の発達理解と援助」チャイルド社 1992年
- 3) 幼稚園教育指導資料第4集「一人一人に応じる指導」文部省 1995年
- 4) 田代和美 保育研究VOL.12-4「子どもとの関係の中で捉える保育者の影響と役割」建帛社 1995年
- 5) 坂本龍生他編著「障害児指導の方法」外苑社 1990年
- 6) 吉村真理子 保育研究VOL.16-1「保育者にとって記録とは」建帛社 1995年
- 7) 大場牧夫, 森上史郎, 渡辺英則 保育研究VOL.16-3「保育カンファレンスのすすめ」建帛社 1995年
- 8) 「子供の主体性を育てるには 一個に即した援助のあり方を探る」大分大学教育学部 附属幼稚園研究紀要 1990年